

# 東方紅虚偽

rick@吸血鬼好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

それは偽者の吸血鬼と歩む、嘘の物語。

※筆が乗ったら書くくらいの不定期となります。

# 目次

|         |         |         |         |
|---------|---------|---------|---------|
| 4<br>話目 | 3<br>話目 | 2<br>話目 | 1<br>話目 |
|         |         |         |         |
| 30      | 21      | 10      | 1       |



## 1 話目

母さんは私に言った。

『死なないで』

たった一言。それから言葉繋ぐ暇もなく、悪魔に殺された。

その原因は、この世界ではよくある戦争。人と悪魔が。時には人同士が争い、望むモノを手に入れる。権利の争い。主張の争い。派閥の争い。それら全てを私は嫌悪する。『争いは何も生まない』なんて言葉があるけども。私の中では嫌悪が生まれた。復讐心が生まれた。敵意が、殺意が……負の感情が溢れ返った。

そんな私をお母さんが見ればどうなるか。まだ13歳の私でも、容易に想像できる。ただそれでも、私は悪魔を許せなかつた。争いを憎むことしかできなかつた。……今の自分の境遇を、恨まずにはいられなかつた。

「あら。これも可愛いわね。やっぱり白い髪に合うわね。赤色のドレスっ」

「……………」

殺意や羞恥心に手を震わせながら、私はされるがままに着替えさせられていた。相手は母親を殺した者と同種である、悪魔——吸血鬼。見た目は幼く、私と近い年くらいで

も、その年齢は遙か上。そして、その力も遙か上。

「アナベラ……私の可愛いアナベラ……。似合ってるわ。その美しいドレス……」

その吸血鬼は私の首筋を舐め上げ、誘惑するように耳元で吐息を零す。もはや同族となった私だが、未だに抵抗できるほどの力は持ち合わせていない。

「……やめて」

「うーん、どうしようかしら。……いえ。そうね。そろそろ食事の時間だったかしら。なら、また後で楽しみましょ……？」

「……っ」

今私は、吸血鬼擬きとして、本物の吸血鬼である『レミア・スカーレット』という幼き少女に仕えている。悪魔を嫌う私がどうして吸血鬼に仕えてるか。それは単純なこと——私が悪魔に魅入られてしまったから。

数日前のこと。私の住んでいた街に吸血鬼達が攻め入った。後から聞いた話によると、スカーレット家を含む幾つかの吸血鬼達が食糧確保と拠点確保のため攻め入ったらしい。

結果から言うと、人間の敗北。圧倒的な力の差に何もできず、隣の人間を生け贄に生

き延びるしか道は無かった。それでもかなり狭く、細い道で。……助かった人間がいるのかはわからない。ただ、生存競争に負けた人間達に権利などなく。その大半が食糧として連れて行かれた。中には玩具のように弄ばれた人もいる。……後者が、私とお母さんだった。

圧倒的な力の差に抵抗もできない。私の母は、私の目の前で吸血鬼の一人に弄ばれ……私に一言放った後に、死に至った。しかし私にそれを実行するための逃げる力はなく、気付けば地面に横たわっていた。血が流れ、足の感覚が消え、目が霞む。死の間際になるとどうなるかを実感した。

『退きなさい』

そんな声が聞こえたと思う。私は霞む目を凝らして吸血鬼を見た。……はずだったが、そこに私達を弄んだ吸血鬼の姿はなく、代わりに小さな少女が悠々と立っていた。

『大丈夫だった？ 私はレミリア。……貴女の名は？』

『あ……アナベラ』

優しく語りかける少女に、私は思わず口にしてしまった。思えばこの時だったのかも。しれない。私が大きく、運命という名の道を踏み外してしまったのは。

『そう……。アナベラ、貴女はもう長くない。だから——私が貴女を助けてあげるわ』

助けられたと思ったのも束の間、彼女は私の首に噛みつき——人間としての私は消え

た。そこに残ったのは。生き残ってしまったのは、忌み嫌った悪魔——吸血鬼としての私だった。元々金色だった髪も真っ白になり、青い瞳は主と同じ紅色に。……そこに、人間だったアナベラの面影は、少しも残っていないかった。

というわけで、お母さんとの約束を守りはしたものの、情けなくも吸血鬼擬きとしての生を受けることになった私である。一度死の恐怖を味わったせいも、自害しようにも恐ろしくてできぬ。それにお母さんとも約束したんだ。何があっても死ねない。というか怖いし死にたくない。

さて、何故私は嫌った種族の家に過ごしているのか。それには2つ理由があった。1つは何処かに行くあてがないということ。何処に行こうと、吸血鬼擬きとなった私は迫害される。だから私にはここしか居場所はなかった。

「さあ、アナベラ。……いいわよ、食べても」  
「っ……」

服をはだけさせ、首筋を露わにするレミリア。私は我慢できずに、その首筋へと噛み付いた。牙で傷付けられた白い肌から、紅い血が零れていく。零れ、滴る血を舌でなぞって掬いとる。口の中は果物のような甘味が広がっていた。



「あああ……っ。いいわ。アナベラ、凄く……いい……っ」  
「う、う……っ」

レミアアの嬉々とした声に羞恥心と苛立ちを感じるも、やめることができない。私の身体は、本能的に血を欲していた。

これが、もう1つの理由。私は血を欲する。血に飢え、喉が渇く。それを癒すためには、生き血を吸うしかない。生き血とはもちろん人間の、である。吸血鬼は生き血として判別されないが、例外的に主の血は渇きを癒してくれる。

「うっ……はあ、っはあ……」

「アナベラあ……。もつと、吸っていいのよ？ 私は貴女を受け入れてあげるわ……」

これでもか、というほど血を吸ったはずなのに、レミアアは依然として吸血を望んでくる。蠱惑的な表情を浮かべ、誘うように両手を広げている。もはや別の意味で恐怖を感じるほどだ。なんでこんな変態に好かれたんだ私。

「もう、充分……。あなたの血なんて、もう要らない……」

「ふふふ。次も楽しみにしているから、ね？」

冗談でも何でもないのに。冗談と受け取ったのか、彼女は笑みを浮かべ服を着直していた。いや、実際私はこの娘の血が無いと生きていけないから、吸わないという選択肢は無いんだけど。それを知ってるからこそ、笑っていられるのかな。……酷い吸血鬼

だ。

「さあ、さつきの続き。しましよう？ 赤いドレスもいいんだけど、私とお揃いのものも似合うと思うのよねえ」

「……どうして着替えさせるの？」

さつきからずつと気になってたことを、意を決して聞いてみる。

「あら、分からない？」

「……吸血鬼の思うことなんて、分かるわけない」

「あらあら。貴女だつてもう吸血鬼じゃない。……でもいいわ。教えてあげる。可愛い娘にもつと可愛くなつてほしい。なんてのは当たり前じゃないかしら。それに……もう貴女は紅魔館の一員なんだから。着飾らないとダメよ？」

「ええ……」

そう言われても、私はこれ以上誰かに見られたくないんだけど。それでも着飾る必要があるのか。単純にこの人の趣味趣向なんじや……。

「あら。変な顔してどうしたの？ 貴女は笑つた方が可愛いわよ？」

「……ははっ。わろえない」

むしろどうしてこんな状況で笑えるというのか。この吸血鬼、やつぱり人間と感性が大幅にズレているのか。恐ろしい……。

「ん……もう空が明るくなってきたわね。アナベラ、一緒に寝ましょう？　もちろん拒否権なんてないわよ？」

「……………」

どうしても首を横に振れない。視線を合わさないよう、頭を下げるしかできない。この吸血鬼は吸血鬼の私にとって親であり、主である。私を巡る血には、そう刻まれたのだ。だからなのか、逆らう気力が削がれている。……もしくは私自身の生への執着か。「もう、返事をしてくれないと寂しいじゃない」

「……………はい、レミリアさん」

「違う、そうじゃないでしょう？」

顎をクイツと持ち上げられ、紅色の瞳が目に入る。それはまるでルビーのようで。人の心を惑わすような魔力が秘められているように感じた。

『お姉様』よ」

「……………はい、お姉様」

「えらい、えらい。アナベラはいい娘ねえ……」

抱擁されながら、頭を撫でられる。屈辱感を感じる。そして——謎の安心感を得ていた。心が安らぐような。守られているような。そんな安心感。……どうしてそんなものを感じるのか分からない。嫌いな種族の一人のはずなのに。親を殺した奴と、同じ種

族なのに……。

「もしかして眠たい？ いいわ。寝室まで連れて行ってあげるわね」

「……え？ あ、や、やめっ」

「遠慮しないでいいの」

半ば無理矢理抱き上げられ、お姫様のように抱っこされる。身長は差ほど変わらないのに、私を持ち上げられるのは吸血鬼の力があってこそ、だろうか。

「……自分で、歩ける」

「知ってるわよ。たまには甘えなさいな」

「……まだ、来てから数日しか経ってない」

「それも知ってる。アナベラ。もう貴女は家族なのよ。だから遠慮なんてする必要はないの。それにもう着いちやっただわ」

歩いて向かってたはずなのに、いつの間に着いたのか。もう寝室の扉の目の前だった。

「さ、一緒に寝ましょうね」

「……あう」

「安心して。悪いようにはしないから。ゆっくりお休みなさい……」

ベッドに寝かされ、隣に吸血鬼が入ってくる。それだけでは飽き足らず、彼女はなだ

めるように私のお腹に手を置く。そして一定のリズムで優しくた叩き始めた。

「アナベラ、おやすみなさい……」

「……………」

甘く優しい言葉に眠気が誘われる。昼夜が逆転した生活も身体的な変化のせいか、既に慣れてしまっていた。そのせいか、朝になる直前だというのに、私は抵抗することもできず目を瞑った。夢を見ることもなく、ただただ深い、深い眠りについた。

結局のところ、私が願うのは死にたくない。そんなありふれた感情で。例えこの吸血鬼を殺しても居場所なんて無いから、殺す意味が無い。嫌悪はしても、苛立ちを覚えても。生きたいと願う私にとって、ここより安全な場所は存在しない。吸血鬼が私を好む限り、必要以上の衣食住は受けられる。

その恩恵はいつまでもつか分からないが、生きるためには、ここで暮らすしか道は無い。

## 2 話目

目が覚めると、見えたのは白い天井。見慣れたボロいものじゃなく、傷も汚れも無い真つ白で綺麗なもの。

「フラ……うんう」

そして、隣には淡い青色の髪を持つ女の子。それを見て改めて私は『昔と違うんだ』と思えた。

生活が違う。環境が違う。食事が違う。横に居る人も違う。私という存在すらも……全てが違う。何もかもが昔と違う。それでも適応しようとして。生き続けて。我ながらよくこんな世界で生きていけるなあ、と感心している。こんな体験談、去年の私に言っても信じてくれないだろう。昔に戻れるなら戻りたいんだけど。

「……眠ってたら、ただの女の子なのに」

あと背中の中と、私を抱きしめている力をもつと弱ければ、というのも付け加えておくけど。しかし、寝惚けているとはいえ、私が潰れてないということは、ちゃんと加減してくれているのかな。それとも私の力が強まっているだけなのか。どちらにせよ、『抱きしめられて死亡』という変な死に方しなくて良かった。

それと私の名前じゃないみたいだけど、誰だと思つて抱きしめているんだろう。もしかしたら、私の前任者とか。……そう思うと、いつか気まぐれに殺されそうで怖い。見ないつてことは、そういうことだろうし……。

「お嬢様ー。もう日が暮れてますよー。あ、アナベラさん。もう起きていたんですね！」  
「……美鈴さん、おはようございます」

声がかげ、首だけ回して声を出す。しかしこの吸血鬼、本当に抱きしめる力が強い……。

起こしに来てくれた彼女はメイド長の美鈴さん。他のメイドと違って妖精じゃないらしく、隣の吸血鬼以外の唯一の妖怪だとか。本性を隠してるかもしれないけど、見る限り唯一の常識人。多分、この館の中なら感性は人間に一番近いんじゃないだろうか。だからなのか、つつい私も気を許してしまう。

「おはようございますー。アナベラさん、お嬢様にお伝えください。『食事の準備ができました』と。もちろんアナベラさんの分も同じくご用意していますよー」  
「……うん。分かった」

多分吸血鬼の命令なんだろうけど、できれば一緒に食べたくない。というか、私もあいつも血さえあれば生きられるというのに。どうしてわざわざ食事なんて摂る必要があるのか。それも、私に出される食事は、人間の時のものと変わりないというのに。

……本当に、不思議だ。

「ではでは。私は仕事に戻りますねー」

「……うん」

美鈴さんが去り、残された私と私に抱きつく吸血鬼。どうしても視界から外れない小さな顔。彼女の執着心は、寝ていても健在らしい。恐ろしいや。

「……レミリアさん、起きて」

肩を掴んで揺さぶるも、全然起きる気配はない。逆に抱擁する力が強まつてる気さえする。嫌だけど、こうするしかないか……。

「……お姉様、起きて」

「うん……？」

私がそう呼ぶと、彼女はうつすらと目を開けた。やっぱりそう呼ばれるのは嬉しいのか。なんだか癪だ。

「あら、アナベラ……おはよう。ふあああ……」

「……おはよ。美鈴さんが、ご飯できたって」

「そう……。それで起こしてくれたのね。流石私のアナベラだわ」

「うぐつ……う、うん……」

褒められるのは慣れたけど、それで抱きしめられるのは未だに慣れない。何が問題



かつて、抱きしめる力が強過ぎる……。それとなんだか、熱くなるような。変な気持ちになるからやめてほしい。

「さあ、行きましょうか。私のアナベラ」

「……貴女のじゃ、ない」

「またまた。早く着替えなさいよ。そしたら一緒に、ね？」

「……はい」

嫌だ、なんて口が裂けても言えない。彼女は私という存在にとつての『親』だからか。もしくは私が単に怖いだけか。どちらにせよ、怖気付いてることには変わらない。

その後、結局私は彼女にドレス姿に着替えさせられ、食事を共にすることになった。

「アナベラ、今日は図書館に行きましようか」

「……？」

食事を食べ終えた後、突然そんなことを口に出す吸血鬼。しかし、図書館とは、どういうことだろう。そこに行つて、何をするつもりなんだろうか。

「ああ、図書館と言つても外に行くわけじゃないわ。街まで行くなんて危ないし。この館の地下には、とても広い図書室があるのよ。それこそ魔導書から禁書まで、なんでもあるんじゃないかしら」

「……そうなんだ」

なんで危ないものしか置いてないの。そんな場所に行つて、本当に大丈夫なのかな。下手すると私、生け贄にされるとか、そういうオチなんじゃ……。

「ささっ。行きましよう？ 早いに越したことはないわ」

「……は？」

吸血鬼に無理矢理手を引つ張られ、廊下を歩く。ただその力は強くなく、むしろ優しいものに感じた。

「……何をするの？」

だからなのか。気付けば私は、思わず口に出して聞いていた。思えば彼女に何か質問することなんて、極端に少ない。……何故かは分かる。私が、知ることを。聞くことすらも怖かったから。

「あら。そうねえ。隠したところで無駄ね。びつくりさせたかったのだけど。貴女にも自衛する術を覚えてもらおうと思つてね。不死に近い肉体があるとはいえ、それでも普通の吸血鬼には劣るわ。だから、魔法の1つでも覚えてもらおうと思つてね」

「……魔法？」

王に仕える魔導士や魔術師の話はたまに聞くけど、要は私にそれになれと言つてるのだろうか。誰でもなれるものじゃないと思つてたけど、私にも覚えられるのかな。

「ええ。正確には魔術と呼ぶのかしら。まあ私には不要なものだから詳しくは知らないわ。ただ、はつきり言つて貴女は妖力が弱い。元人間だから仕方ないけど。私もまだ幼い吸血鬼だったのが影響してるのかもしれないわね」

「……えつと、だからどういふこと？」

「うん？ 妖力が弱いから、他の力で補う必要があるつてことよ。最近割と物騒だからねえ」

物騒なのは誰のせいだと思つてるんだらう、この吸血鬼。生きるために人を襲つてるんだから、物騒になるのも当たり前だと思ふんだけど。

「話してるとあつという間ね。アナベラ。ここが大図書館と呼ばれる場所よ」

「……広い」

着いた先。大図書館と呼ばれたそこは、私が見た何処よりも広い部屋で。見渡す限り

の本棚。そしてそれを埋め尽くす大量の書物が目に入った。一体どれだけの本があるんだろう。数え切れないってレベルじゃない。もはや数えるのが……。

「ふふ。驚いてくれて私も鼻が高いわ。と言つても、集めたのは私じゃなく、先代の当主。私のお母様ね」

「……？ お父さん、じゃなくて？」

「お父様は先々代。色々あつて、生きてる間にお母様に受け渡したのよ、主という立場をね。それと……先代と聞いて父親と思うなんて、偏見よ？」

「……それは、ごめんなさい」

「ふふ。いいのよ。別に怒つてるわけじゃないから。ただの冗談よ」

若干目が本気だった気がしたから、素直に怖かった。でも、受け渡したって何があつたんだろう。……まあ私には関係無いから気にしても仕方ない。それにこれは、吸血鬼達の問題だろうし。

「それよりも。貴女はこれからしばらくの間、魔術を学んでもらうわよ。私も手伝うから、安心してちょうだい」

「……でも、さつき魔術はよく知らないって」

「ええ、知らないわ。でも手伝うことはできるわよ。私にはね、運命を見通す力があるの」

「……………」

突然どうしたんだらう、この吸血鬼。……目が本気だけど、正直何を言ってるのか私には分からない。

「貴女の運命に最も適した力を知り、教えることくらい可能よ」

「……………」

「あらあら。その顔は信じてないわね？　でも、仕方ないわね。急にこんなこと言われても分からないのは仕方ないわ」

分かってるならどうして口にしたんだらう。自慢したいだけなのかな、私に。

「早速だけど、一緒に探しましょうか。貴女に最も適するものを。それとも、先に吸血する？　私はどつちでもいいわよ」

「……………」

「あらそう。……それはそうと。ふと気になったんだけどね」

「……………」

「あまりはつきり喋らないのは私と話したくないから？　それともまだ吸血鬼の牙に慣れないだけかしら」

「どうしよう。……元からあまり喋る方じゃないだけなんだけど。何かを口にして話すの、苦手なだけなんだ。強いて言えば、前者はあるかもしれないけど。それでも、そ

れを言うのは……。

「別に隠さなくてもいいのよ？ それでも言いたくないならそれでいいわ。でも私は……できればもつと喋ってほしいわね。せっかく姉妹になったんだから」

「……………」

「ふふ。恥ずかしがつてるなら嬉しいわね。さて、探しましょうか。貴女の運命、私に視せてちょうだいね？」

「……………」

どうせ断つても視ると知ってるから、それはいいんだけど。それより具体的にどうすればいいのか教えてほしいんだけど。

「ああ。魔導書はあっち側に集まってるわ。禁書もいいけど、危険なものが多いからオススメはしないわ」

「……………魔導書、漁ればいいのか？」

「そうね。まずは簡単なものから読んでいきましようか。そして、魔を知り、術を学び……貴女が自衛する力を入れるまで。そうねえ……最低でも、私相手に10分くらい持てばいいかしら」

「……………えっ」

戦わないといけないの？ えっ。私死にたくないんだけど。できれば戦わずに、自衛

なんてする必要もなく穏やかに生きたいんだけど。だからこそ、抗わないでここに居るのに。……もしも、という可能性は分かる。だけど、私はもう二度と、あんな怖い思いをしたくない。

「大丈夫よ。アナベラ、安心しなさい。別に本気でやるわけじゃないわ。怪我はするかもしれないけど、重傷を負うほどやるわけじゃない。それに、実戦だつて必要が無ければ戦わなくていい。貴女は守られていいのよ」

「……………」

そんなこと言われたつて……必要があれば、戦うことに変わりない。もし。もしもそんな時が来れば、本当に守ってもらえるのかな。全く、貴女を見ようとしないう私を。未だに、この生活に不満を露わにする私を。

——レミリアは、守ってくれるの？

「あら。何も言わないつてことはまだ不安なの？ 仕方ないわねえ」

「……………」

温かな抱擁。珍しくも力強くなく、優しく包まれるような心地よいもの。吸血鬼は母親のように、私を抱きしめてくれた。そういえば私を抱きしめてくれたのは、お母さん以外だとこの吸血鬼しか居ない気がする。……本当は、吸血鬼が憎いはずなのに。本当に、私はどうしたいんだろう。

「これで少しは安心した？ さあ、早く魔導書を読んで、学んでみましょう。そして、私に聞かせてちょうだい。初めて神秘を手にした時の気持ちを、ね？」

「……うん」

吸血鬼の顔はまるで子どもそのものに見えた。期待に満ち溢れ、希望に目を輝かせて。何処にでもいるような、至って普通の女の子。そんな印象を受けた。……自衛の手段を覚えるくらいなら、私もちやんと、やる気を出していいかも。そんなことを思った私は、レミリアとともに本を漁る。



## 3 話目

林檎を目の前に、1枚の紙を手を持つ。紙を持つ手に力を集中させ、そつと林檎に振り下ろす。

その結果、林檎に紙が突き刺さり、止まった。……本当は林檎を切るつもりだったのに、失敗したみたい。

「……やつぱり、私には無理」

「無理じゃないわ。ただの羊皮紙パーチメントで林檎を切れるまで来たんだから。もう少し頑張ればナイフのように切り裂くことができるわよ」

と言われても、紙で切れるようになっただけなんて、正直成長しているという実感が湧かない。それに紙で練習してるけど、こんな高価なものが何処にもあるわけじゃない。今使わせてもらってる羊皮紙は吸血鬼が持ってきたものだけど、数は多くないと言っていた。ただ私の練習のために、分かりやすく練習しやすいものを持ってきてくれただけで。正直、これなら実際にナイフを使った方が強い気すらする。

「浮かない顔ね。大丈夫よ。本来、魔術を覚えるのだから並の人間にはできないことなの。それができた貴女は、もっと強くなれるわ」

「……はい」

私はもはや並の人間じゃないんだけど。それに覚えたと言っても、私のは……。

私が覚えたものは『代替魔術』というもの。文字通り何かを『代替』する魔術。本当は儀式での間に合わせに使うような、魔術では初歩的なものらしい。彼女に手伝わってもらった結果、最終的にこの魔術に辿り着いた。

理由としては初歩的な魔術故の魔力コストの低さ。私との相性。不意打ちに利用できる、などなど。一番大きいのは、吸血鬼が最初に言っていた相性なのかな。

「うーん……。多分少なくとも妖力と併用すれば、もう少し凄いことはできるでしょうけど……」

「……？ それなら、妖力の使い方を……教えてくれるの？」

「そうねえ……。貴女が望むなら、ね。でも、使いたくないでしょう？」

「……………」

言われてから思ってしまったけど、親を殺した吸血鬼の力なんて、確かに使いたくない。でも、それでも。生きるために必要なら私は……。

「ああ。そうだわ。妖力を使わずに利用する手はあるわね」

「……そうなの？」

「ええ。それこそ代替すればいいじゃない。妖力を、魔力にね」

「……あ」

代替魔術の原則。それは代替の対象となったものが、目的のものに見合うかどうか。棒で人は切れない。ただ紙なら、人を切り得る。本来の目的を実行するための可能性が、少しでもなければ代替することができない。その少しとは、本来の用途に代用できるか、じゃない。紙でナイフを代替できる魔術だから。もつと曖昧な……紙で例えれば『切れるか。切れないか』なんて些細なものなんだと思う。

そして、妖力や魔力などの力に呼び名以外の違いはほぼ無い。ただ使う人が違うだけなんだから。……なんて、吸血鬼が言ってた記憶がある。

「そうと決まれば練習するに越したことはないけれど……。まだ大丈夫かしら？ 長い時間頑張ってたんだから、少しくらい休憩してもいいわよ。私がいる間は急ぐことでもないしねえ」

「……あと、ちよつとだけ。頑張ってみる」

「ふふ。そう。なら私も手伝ってあげるわね。ちよつと失礼して」

そう言つて、吸血鬼は私の正面に立つ。私の両手を握り、祈るように顔の前まで持ち上げた。元は人間である私でも、何かの力が流れ込んでくるのが分かる。多分、吸血鬼の妖力が。

「妖力は私達が生きていくためには必要なエネルギー。使いすぎれば疲労するのよ。だ

から、私の力も貸してあげるわ。魔力として代替してみせて。そうすればきつと、林檎も切れるようになるんじゃないかしら。まだ未熟な魔術でも魔力でゴリ押しできるでしょうしね」

「……うん」

その感覚さえ掴むことができたなら、自然に自分の妖力も代替することだってできるのかな。——手伝ってもらってるわけだし、しつかりやらないと。

集中する。自分の力に。流れ込む吸血鬼の力に。そして行使する。代替する。妖力を魔力へ。その余剰魔力を、再び代替魔術に割いていく。今度はより大きく。強い魔力を使いながら。

「そのまま、これで切ってみなさい」

そう言つて渡されたのは2枚目の紙。私は頷きそれを受け取ると、その紙を刃に代替する。そして、林檎へ向かつて投げつけた。

今度は刺さったままの紙ごと真つ二つに切り裂かれる。明らかに並の刃よりも鋭く、硬いものに代替されていた。これを私がやったのだと思うと、嬉しい反面ゾツとする。こんな力が私にあるんだ、つて。

「ふふっ。流石私の妹ね。凄いいじゃない」

ただこの吸血鬼にとっては喜ばしいことだったらしい。彼女は自分のことのように

喜びながら、私の頭を撫でてくれた。でもこれは、自衛には有り余るほど強い力。いや、私にとつてはそう感じるだけで、この吸血鬼にとつては当たり前前の力なのかな。

「……ああ」

ふと、目の前で死んだお母さんの姿を思い出し、納得してしまった。いとも容易く人間を殺せるんだから。この程度の力で驚いてちやダメなんだ。人を超える力を手に入れてようやく、人間じゃなくなるだけなんだ。そして私は、ようやくそのスタート地点に立っただけなんだ。

「あら、どうしたの？ アナベラ」

「……ううん。なんでもない」

「そう……」

どうして不機嫌な顔をしてるんだろう。何も話さないことに怒ってるのかな。それとも……。

「あつ」

「ん？」

「……あ、ありがとう。……その、おねえ、さま」

「……！ ふふふ。ええ、どういたしまして。ふふつ。偉いわね、アナベラつ」

吸血鬼は嬉しそうに、私を抱きしめてくる。やっぱり、お礼を言っただけじゃなかったんだ。

手伝ったことへの。……なんで、私は親を殺した種族と仲良くしてるんだろう。生きていから、なのかな。……自分で自分がよく分からない。もう、何を思ってるのかも分からない。

——矛盾した自分の気持ち……。嬉しいっていう気持ち分からない。

「ところでアナベラ。そろそろ休まない？ いつもならもう吸血してる時間帯よ？」

私から離れ、心配そうな顔でそう話す。いつもなら、つて。私の吸血つてそんな規則正しいものだったっけ。そんなことを思いつつも、口には出さずにそつと頷く。

「……うん。そうだね。えつと……でも、もう少しだけ続けたい。今度は……自分の力で」

吸血鬼に頼りになってばかりじゃ、この先何かあった時が怖い。もう私は人間じゃないんだから。親を殺した種族と半分くらい同じになってしまったんだから。……もう、怖がつてたらお母さんとの約束を果たせない。

「いいけど……大丈夫？ さっきも言った通り、妖力は使い過ぎれば疲労してしまうわ。流石に死にはしないけれど……」

「……大丈夫」

「貴女がそう言うなら、いいわ。でも、無理し過ぎないでよ。疲れても、私の血を吸えばいいだけなんだけれど。じゃあ、もう一つ置いておくから、切ってみなさい」

そう言ってフルーツバスケットから林檎を一つ。さつき切り裂いた林檎が置かれた机の上に起き直す。そして壁に刺さったままになっていた紙を私に寄越すと、彼女は椅子の上で楽な姿勢を取っていた。

「……………」

自分の中にある妖力を一部だけ魔力へ代替させ、紙に魔力を集中。そして、紙を持つ手を振り下ろす。スバリ、と林檎が切り裂かれる。感触はまるで柔らかい何かを切っているかのようだ。こんなにも、簡単に切れるとは。成功するとは、ぶっちゃけると思っ  
てなかったんだけど……………」

「ふふっ。よくやったわね、アナベラ。魔力面はこれである程度は心配ないわね。身体能力はあるし、あとは体術でも覚えれば並の妖怪を倒せそうねえ」

「……………体術?」

「ええ。……………ああ、美鈴に習ってみる? あの子、体術だけで言えば私よりも上なのよ」

美鈴さん、やっぱりただのメイドじゃないんだなあ、つて。でも、今でさえ充分忙しい  
そんなイメージがある。そんな人に頼って、あまり迷惑をかけたくない。

「……………ううん、大丈夫。忙しく、させたくない、し」

「別に平気だとは思うけどねえ。まあいいわ。気が変わったら、いつでも相談しなさい。  
私でもいいし、美鈴相手でもいいからね」

「……………うん」

気が変わることもなつてなかなか無いだろうけど。もしそんな時が来れば、美鈴さんに相談しよう。人を介してじゃなく、直接話した方がいいだろうし。

「ただ、そうね。時間さえ稼いでくれたら、必ず守つてあげるから安心なさい。貴女を見捨てることなんてしてしないから、ね？」

「……………うん」

優しくしてくれるのは、どうしてなんだろう。代わりが見つからないからなのかな。それとも……………。

「さて。そろそろいいかしら」

「……………？」

「吸血よ。あら、そんなに衝動湧かないのかしら。ああ、いつも量が多いせいね。きつと」

いつも多かつたんだ……………。なら、もう少し減らして飲んでもいいよね。吸い始めると、止められなくなっちゃうけど。そういう意味では、衝動が弱いわけでもないのかな。

「さあ、アナベラ。来なさい」

「……………」

手を広げて待つ吸血鬼に、私はゆつくりと近付く。私が彼女に近付くと、優しく抱擁



してくれる。吸血鬼の甘い匂いが鼻に伝わる。間近に迫る彼女の顔が、なんだか可愛く見えてしまう。嗅覚が、視覚が本能を刺激し、血を求め。

「あ………」

私が無言でその首筋に噛み付くと、吸血鬼は短く声を漏らす。その嬌声は私の感覚を研ぎ澄まし、私の快感を沸き立たせ。赤い液体が、私の舌を伝い、私の喉を潤していく。

「ああ……。積極的ね……。っ」

無我夢中で吸血鬼を引き寄せ、抱きしめて。溢れ出る血を舐め尽くし……。

私はそれから数十分の間、吸血鬼から離れられずにいた。

## 4 話目

「ふう……。お疲れ様、アナベラ。今日も可愛かったわ」

「……………」

乱れた真つ白なドレスに付着した真紅色の染み。佇まいや傲慢な性格から貴族に近いものを感じていた吸血鬼は、それを気にせず私を抱きしめていた。それは人間と吸血鬼の差だろうか。それとも、それが気にならないほど疲れているのだろうか。

「アナベラ、いつも1人でお風呂入ってるわよね？」

「……………」

突然どうしたんだろう。吸血鬼は顔を持ち上げ、私の瞳を見ながら尋ねてくる。覗き込む瞳は、その血のように真つ赤だ。

「1人に入るなんて、寂しくないかしら？」

「……………え？ いや、別に」

本当に突然どうしたんだこの吸血鬼。もうなんか察してしまっただけ、それだけは嫌だ。何が起きるとか明確なことは分からないけど、嫌な予感しかない。

「そうなの？ 私は寂しいわ。今日は一緒に入りましょう？」

今までそれとなく避けてきたのに、ついにその言葉が吸血鬼の口から出てしまった。一度、断つてみるのもありなのかな。もしかしたら、素直に受け止めてくれるかも……。でも、いつも優しいからって今回も優しくしてくれるとは限らない。それに、良くしてもらってるのに断るのも悪い気がする。

「…………え、つと。お姉様に、任せます」

迷った結果、判断を吸血鬼に委ねることにした。今まで彼女の方から手を出したことは少ない。強いて言えば触ったり、抱きしめたりされたくらいだ。だから、多分今回も大丈夫。そう思つて彼女に任せてみた。

「あら。…………それなら一緒に入りましょうか。アナベラ、せつかくだし…………いえ。なんでもないわ。服は、いつも通り私のもので構わないわね？」

「…………うん」

私が頷くと、吸血鬼はクローゼットから服を2人分取り出す。私がいつも着ている服は吸血鬼のもの。元々着ていた服は汚れていた挙句、修復不可能なほど破れていたのを捨ててしまったらしい。

「それじゃあ行きましようか」

「…………うん」

吸血鬼は楽しげに手を差し伸べる。そんなに私と一緒に入るのが楽しみなんだろう

か。よく分からない。だけど、嬉しそうな吸血鬼を見てると……ううん。きつと気のせいだよな。

「アナベラと入るの楽しみねえ。どう？ アナベラは緊張しない？」

「……き、緊張？ どうしてそんなのするの……？」

「あらら。そっかあ。感じないのね、残念。まあいいわ。私は少し緊張するのよ？ 初めて貴女と入るからね」

隣で歩く吸血鬼はそう言つて微笑む。そうは言われても、なんて返せばいいんだろ。緊張しないのは、嘘じゃないし……。えつと、本当にどうしよう。このまま黙つてた方がいいかな。下手なこと言うよりは、いいよね。

「……アナベラ？」

「……え？ あ、えつと」

「ふふつ。貴女も本当は緊張しているのかしら。もしそうなら嬉しいわね」

別にそういうことじゃなかったんだけど、勘違いされたみたいだ。これは良かったのかな。正直なところ何が正解かなんて分からないし、気にしても仕方ないのかな。

「さて、と。アナベラ、服を脱がせてあげましょうか？」

浴室までやって来た時、彼女は服を脱ぎながらそう言った。どこか嬉しそうで、期待に満ちた目。私の本能が警鐘を鳴らしている。それを許せば何かを失ってしまう、と。

なんだか久しぶりに感じた危機に、私は思わず首を振っていた。

「……うん、いい。自分で脱げる、から」

「そう……。なら先に待つてるわよ。ああ、アナベラ。急がなくていいからね?」

吸血鬼はそう言い終えると、脱ぎ終えた服をカゴに放り捨てる。そして布を一枚取ると中へと入って行つた。何百年も生きてるとあんなに手馴れるんだ。なんて思いながらも、待たせるのは悪いからと、タオルを手に取り急いで彼女の後に続く。

「アナベラ、こつちよ。来なさい」

「……うん」

この館のお風呂は、貴族の館と呼ぶに相応しいほど広い。よく見る居酒屋や宿屋にあるような銭湯よりも大きい。どうなつてるのか、よく分からない設備もある。恐らくは吸血鬼達の技術力によるものなんだろうけど、その用途は詳しく知らない。魔術やら妖術を使っている何か、としか私は知らないし、あまり興味もない。

「このお湯を使って泡を落とすのよ。って、いつも使つてるから知つてるかしら?」

「……うん、大丈夫」

ここに来てからは、ほぼ毎日のように入つてるから。というか「吸血鬼だから」と入らされている気もするけど。常に清潔な身体を保つておくべき、というのは分かる。だから断ることは無いんだけど。

「そう。でも今日は特別。洗ってあげるからもう少し近付きなさい」

「……………え？ い、いえ。いい、です」

「遠慮しないでよ。貴女はもう、私の妹の1人なんだから」

「……………」

その言葉に何も言えなくなってしまった。断るのも失礼になるし、正直なところ変なことをしなければ拒む理由もない。

——でも実際のところ、私は嬉しかったのかな。その言葉を言ってくくれる人が、まだいることに。

「くすぐったかったら言っただけ」

吸血鬼は泡を手につけ、私の身体に丁寧に泡をつけていく。右腕から左腕。胸やお腹も。優しく撫で回される。ただいやらしいとかそういうのじゃなくて。本当に、姉が妹を洗ってくれるかのように。そして……………抱きしめるような形で私の背中まで手が届く。

「……………」

「あら、大丈夫？」

抱きしめられて撫でられて、身体を震わせる。それに気付いてか、吸血鬼は手を止めて尋ねてきた。

「……………大丈夫」

大丈夫じゃないと知られるのがなんとなく怖かった私は、視線を下げてそう言った。そんなことをすれば嘘だと教えてるようなものなのに。思わず、そう言ってしまった。

「そう、じゃあ下も洗っていくわね。足を伸ばして」

「……うん」

「……さあ、洗い流すわよ」

言われた通りに足を伸ばす。さつきと同じように、彼女は丁寧に洗ってくれた。そのまま泡をつけ終えると、お湯を溜めた桶をかけてくれる。流水のせいか若干痺れはするものの、痛みを伴うほどではない。

「吸血鬼は流水を受けると動けなくなるって言うけど、貴女は平気みたいね。」

「……うん、平気」

「そう。さて、私も洗ってちょうだい。せっかくだし、ね？」

私は頷き、吸血鬼がしてくれたように洗い始める。吸血鬼は嬉しそうにしているものの、特に何かすることもなく、されるがまま洗われていた。

「うん、上手ねアナベラ。さて、洗い流して。その後、湯船に入りましたよね」

「……はい」

近くに置かれた桶を手に取り、それを吸血鬼にかけていく。僅かに身体を震わせているのは、私と同じように流水が痺れるからだろうか。

「うんっ……。さあ、一緒に入りましょうか」

「……………うん」

洗い終わると、彼女は笑顔で手を差し伸べてくる。私はその手を掴み、2人して湯船に向かった。

「ふう……………落ち着くわねえ」

「……………」

湯船にゆつくり浸かっていくと、身体が沈むにつれて全身の気だるさや疲れが取れていく。全身を満たす温もりが身体を癒していく。隣に吸血鬼がいるのもお構い無しに、私は全身の力を抜いて休んでいた。

「あらアナベラ。そんなに気持ちいいの?」

「……………別に、そんなんじや……………」

吸血鬼に言われてなんだか恥ずかしくなる。吸血鬼から目を逸らしつつ、壁にもたれるようにして体制を整える。それにしても、なんだか彼女の視線がくすぐつたい。

「ふふっ。隠さなくていいのに。……………ああ、そうだわ。アナベラ、しばらくの間ね、私……………この館を空けることになるわ」

「……………え? ど、どうして?」

思いがけない言葉。思わず彼女に振り返り、声をかけていた。どうしてだろう。心が



ぼっかり空いたような、そんな気持ちになってしまふ。

「ごめんなさいね。数日だけ空けることになるけど、必ず戻ってくるわ」

「……うん」

顔を俯かせると同時に見えた水面に映った私の顔は、どこことなく悲しそうに見える。どうしてこんな顔になってるのか、私にも分からない。私は、そんなに心配なのかな。それとも誰も守ってくれる人が居なくなるのが、怖いのかなのかな。……よく、分からない。

「紅魔館は自由に出歩いてもいいけれど、外には出ないでね。外周は美鈴に守らせるけど、それより外はどうしようもないの」

「……分かった」

「もう、そんな悲しそうな顔しないで。たった数日よ？　またすぐ会えるわ」

「……そんな顔、してない」

「ふふっ。そっか、ごめんね」

そう言つて抱きしめてくれた彼女の身体は、お湯のせいか温かく、そしていつも通り柔らかい。彼女の香りが、私の吸血鬼の本能を刺激してくる。それを我慢するために、私はそつと抱きしめ返した。

「ほんと、貴女も可愛い妹ね。……そろそろ上がりましょうか」

「……………うん」

吸血鬼に引き連れられるように、私は湯船から上がった。